

博士論文要旨

聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援の概念モデルの構築 —支援における複合的交互作用現象—

Constructing a support structure conceptual model for the hard of hearing and the deaf with mental disorders —The complex transaction phenomenon in support—

ルーテル学院大学大学院 総合人間学研究科
社会福祉学専攻 博士後期課程 赤畑 淳

I. 研究背景と問題の所在

近年、メンタルヘルスの課題は多様化し、精神保健福祉領域の支援対象者は広がりを見せている。精神保健福祉領域の支援の場に訪れる人々は、様々な要因が複雑に絡み合った複合的な問題を抱えていることが多く、中には身体障害など他の障害を抱えている人もいる。しかし、精神障害を軸にした他障害との重複障害についての全国的なデータはなく、その実態は明らかにされていない。障害のある人たちも、生活する中でメンタルヘルスの課題を抱えることもあれば、精神疾患に罹ることもある。

重複障害の組み合わせのなかでも、精神障害と聴覚障害の場合には、①障害が目に見えにくくわかりにくい点、②状況によりコミュニケーションの困難さが伴う点、に類似性がある。また、精神障害には、精神疾患ごとに特徴が異なり、障害と疾病が変動的でしかも共存し合うという特徴がある。一方、聴覚障害には、使用するコミュニケーション手段や聞こえの状態などの違い、ろう者・難聴者・中途失聴者などアイデンティティの違いなどを含む多様な様態がある。

このような特徴のある聴覚障害と精神障害を併せ持つことから、その様相は更に複雑になり、個別性も高くわかりにくさを倍増させている。そして、このわかりにくさはコミュニケーションの困難さにより、利用者と支援者との支援関係形成に支障をきたし、結果として支援の継続性を阻害する要因ともなっている。また、二つの障害を併せ持つことで、一領域の単一のサービスでは立ち行かない現状もある。これらのことから、聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援の多くが困難事例として扱われている現状がある。

更に、精神障害と他障害を併せ持つ人々は、どちらの支援領域においてもマイノリティの存在として周縁化され、困難事例として個別に取り上げられることはあっても、その存在や支援自体が広く認知されることはなかったといえる。マイノリティの存在に目を向け、その支援について検討し顕在化させていくことは、人権と社会正義を価値とするソーシャルワーカーとしての使命であると考ええる。

II. 研究目的

本研究の目的は精神保健福祉領域の実践現場で応用できるような聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援の概念モデルを構築することにある。まず、現状把握として、聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援における困難性の構造を明らかにする。その上で、支援の可能性を探るために、精神保健福祉領域における PSW の実践から、一定の概念化された支援行為における対象者理解のプロセスを導き出し、領域を限定した支援の構造を提示する。

Ⅲ. 研究の射程と理論的視座

本研究では、三つの方向（①実践現場、②利用者、③支援者）から射程を定めた。実践現場として取り上げたのは精神保健福祉領域、利用者として焦点をあてたのは、聴覚障害と精神障害を併せ持つ人、支援者として限定したのは、精神保健福祉士（PSW）である。尚、本研究の対象は「支援」であり、調査対象者は「支援者」である。

聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援を考えるにあたり、まず、重複障害について概観した結果、重複障害は統一された定義や概念は存在せず、また、各規定も身体障害や知的障害などを軸としたものであり、精神障害を軸にした規定はなかった。それは、精神障害の特性からくる概念規定の難しさに起因していると考えられた。重複障害分野で多く取り上げられていたのは「盲ろう」の分野であった。そこでは、重複障害は単なる障害の組み合わせではなく、重複していることから新しい障害が生じているという考え方が示されていた。しかし、支援に関してはコミュニケーション保障の検討や、支援上の困難な課題を述べるにとどまっていた。それは、障害は重なることで原因と結果の関係がわかりにくくなり、複雑になることで障害理解の困難さが発生し、支援者にとって支援の困難性が中心にならざるを得ない状況を示していた。

精神障害と聴覚障害を併せ持つ人への支援に関する先行研究では、聴覚障害者のメンタルヘルスに関する心理、教育、医療など他分野の研究は散見されたが、ソーシャルワークの先行研究は数少なく、実践的なモデルを示した研究は見当たらなかった。

本研究の理論的視座として、聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援に援用可能な理論について、支援行為と対象者理解に焦点を絞り概観した。支援行為に関しては、コミュニケーション理論と支援の認識論の必要性を示した。対象者理解については、障害特性の理解も含め感覚・知覚に関する理論、そして支援全体を包括的に捉えるシステム理論が不可欠であることを示した。

Ⅳ. 調査Ⅰ：聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援における困難性

調査Ⅰでは、「聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援における困難性」について文献調査を行った。調査目的は支援における困難性の構造を明確にすることで支援実態を明らかにすることである。調査対象の文献は「聴障者精神保健研究集会報告書」15年間分である。分析方法は内容分析法を採用した。

15年間分の報告書から「支援における困難性」を含む文節を抽出し、保健医療福祉システムを理論枠組みとして分析した結果、利用者、支援者に関するミクロレベルの困難性が全体の約7割を占め、専門性、支援者間、組織というメゾレベルは約2割、社会資源・制度、地域社会、専門家集団というマクロレベルは約1割であった。困難性の内容として、類似するデータを集約し、カテゴリーを生成した。更に、各カテゴリーの考察により、聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援における困難性として、以下の8つの要素を提示した。①障害理解の困難さ、②経験知による行き詰まり、③試行錯誤による支援行為、④複雑化する関係性、⑤地域コミュニティでの誤解や偏見、⑥サービス提供機関の限界、⑦制度・施策の未整備、⑧教育・研修の場の少なさ。

これら支援における困難性は、聴覚障害と精神障害という複数層の障害、利用者と支援者間のコミュニケーション、多領域の支援関係者の連携、組織の方針、制度・政策の限界など、それぞれのシステムが関連し合い、ミクロからメゾ、メゾからマクロレベルの困難現象に発展するという、困難性の構造を明らかにした。

この結果から見えてきたことは、困難性の中核がコミュニケーション不足にあり、なんらかの欠如や不足が原因とされていたことである。困難性の構造は一見システムとしての構図に見える。しかし、考え方としては原因を求める因果論であった。支援を因果論で捉えることは、結果として支援困難な人と可能な人という、二分法で捉えてしまうことになりかねない。ここに支援の困難性の要因を見出すことができた。

この結果は文献調査であるため、明示された文章からしか判断することができないという限界がある。困難の背景には、支援者の工夫や努力などを含む支援行為が存在していると想定し、PSWを対象にインタビュー調査を実施した。

V. 調査Ⅱ：PSWによる支援行為における対象者理解のプロセス

調査Ⅱでは、「PSWによる支援行為における対象者理解のプロセス」として聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援経験のあるPSW15名に半構造化面接によるインタビュー調査を行った。調査目的は、聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援において、継続的なかわり経験を持つPSWが、どのような支援行為を通して対象者理解を深めながら支援を展開しているのか、そのプロセスを明らかにすることである。分析方法として、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を採用した。その理由は、①聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援経験のあるPSWという極めて限定された範囲を調査対象とすること、②ソーシャルワーク実践自体が人と環境との交互作用やプロセス性を重視していることに加え、本研究が対象としている人への支援においては、人と人との相互作用としてのコミュニケーションがポイントとなること、③社会的認知度の低い対象者への支援実態を顕在化させるためには、ローデータを活用したリアリティのある分析が必要と考えたことによる。分析テーマは「PSWによる聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援行為における対象者理解のプロセス」、分析焦点者を「精神保健福祉領域の現場で聴覚障害のある人とかかわり経験をもつPSW」と設定し分析を行った。結果、4コアカテゴリー、10カテゴリー、27概念を生成し、PSWが支援行為により対象者理解を深めているプロセスを明らかにした。以下、分析結果を全体のストーリーラインのみ提示する（結果図および各概念・カテゴリーの説明は省略）。

【全体のストーリーライン】

PSWによる聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援行為における対象者理解のプロセスとは、《感覚コミュニケーションの探究》を《行動密着支援》の中で行いながら、支援における《特殊性と普遍性の認識》を経て、《複合システムの理解》に至るプロセスである。

VI. 考察

二つの調査結果を踏まえ、感覚・知覚、行動、認識、システムの4つの視点から考察を行った。この考察により、支援行為は利用者との交互作用により成り立ち、困難性に対処するための工夫が示されていたことがわかった。更にその工夫には支援展開に応じたプロセスがあることも見えてきた。支援を継続するための工夫を含んだ支援のポイントは以下の5点である。

- ①感覚によるコミュニケーションを探究し、視覚による影響性を意識すること
- ②メタ要素を含む行動コミュニケーションにより、行動密着支援を展開すること
- ③あえて聞こえにとらわれず、支援の特殊性と普遍性を認識すること
- ④複眼的視点の活用により、聴覚障害・精神障害領域による協働体制を作ること
- ⑤二つの文化間の扉を開くことで視野を広げ、複合的システムを理解すること

考察から導き出した支援のポイントは、実際に支援を継続し展開したことで見えてきたものである。逆に言えば、支援の各段階における工夫が、継続的な支援を可能にしていたといえる。これらの工夫がなければ困難を倍増させ、支援中断の可能性も高くなっていたと考えられるのである。

また、支援における困難性がなければ新たな視点や支援の工夫に結びつかなかったともいえる。困難性は支援をすれば生じてくるものであり、困難性が次なる支援展開への原動力になっていたとも考えられるのである。しかし、支援を展開していくためには、支援者側の一方的な取り組みだけでは難しいことも支援のポイントから見る事ができる。支援者は利用者からの影響性も視野に入れ、その交互作用を積極的に活用する姿勢が不可欠だったのである。つまり、支援のポイントは、支援者が利用者の揺れに寄り添うことで生じる、自らの揺れの中から見出したものともいえる。そこには支援者と利用者の各要素間の交互作用として、段階ごとに異なる5層からなる交互作用現象が存在していたのである。

その5層の交互作用現象とは、①感覚・知覚、②行動、③認識、④機関システム、⑤社会文化システムである。更にその現象は、利用者と支援者のみならず、聴覚障害者支援分野と精神障害者支援分野、ろう文化と聴者文化など、多様な要素の複合体により構成される。つまり、聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援は、5層の複合的交互作用現象により成り立っていたのである。

VII. 結論

聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援には、利用者と支援者の感覚・知覚、かわり行動、支援の相互認識による、多層的な現象が見られ、それらを取り巻く支援環境、及び各々の社会的、文化的背景をも含めた交互作用現象が存在している。そして、利用者と支援者、聴覚障害と精神障害、聴覚障害者支援機関と精神障害者支援機関、聴覚障害者支援制度と精神障害者支援制度、手話や筆談と音声言語、ろう文化と聴者文化など、複合的な要素が多層な次元で重なりあい、影響を与えあっている。

この複合的交互作用現象を構成する5つの層と、「支援における困難性」「支援行為における対象者理解のプロセス」を連関させることで、聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援の概念モデルを提示することができた。その支援の概念モデルは、ミクロレベルからマクロレベルまでの領域をすべて包含したシステムによる5層構造の交互作用現象を含むものであった。(概念モデル図、表は省略)

支援における5層の交互作用現象は、それぞれ別々に存在するのではなく、複合的かつ多層構造となっている。この支援構造から、1) 支援の全体性を捉えること、2) 支援を構成する諸要素間の関係性を理解すること、3) 全体性から要素間へと関係介入することで、視点の転換ができ、困難性から捉えていたことが利用者と支援者の関係を含め人の理解の促進につながっていく。つまり、複合的交互作用現象を含む聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援の概念モデルにより支援の全体を捉えることで、困難性が実は理解の原動力にもなり得ることがわかったのである。

これまで、聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援は、困難性ばかりが目され、支援の各レベルでの欠如を中心に引き上げられることが多かった。しかし、実践現場には支援が困難と見なされていた人の揺れに日々の支援の中で寄り添い、コミュニケーションによる理解、理解に基づくコミュニケーションとを繰り返し、支援の手を差し伸べていたPSWによる支援の実体があった。個々の支援の工夫の蓄積と、継続的な支援プロセスの集約により、支援の概念モデルを構築することができたのである。

このように本研究の最大の特徴は、多要素が絡み合う聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援において、困難性から人の理解へ、支援困難という「できない」枠組みから、支援可能という「できる」枠組みに視点の転換が可能となる実践的かつ立体的な支援の概念モデルを提示できたことである。つまり、聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援は困難事例ではなく、支援の意義を双方に実感できる事例であることを本研究により明らかにしたのである。